

ヒマラヤ

No.322



1998 SEPTEMBER



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

1999年H A J 登山隊員募集

未踏峰（カバン 6,717m）

ガネッシュ・ヒマールとランタン・ヒマールの間は、数多くの知られざる山々があります。そのほとんどは6,000m級ですが、これまで全く試みられたことのない山群です。山容は7,000m級の山です。楽しい登山が期待できます。概要は下記のとおりです。

記

1. 期 間:1999年9月18日～11月1日(45日間)
2. 募集人員:6名程度
3. 負担金:95万円

チョム・カンリ（7,048m）

ラサから西北西約106kmの所にあるのが、チョム・カンリです。1996年秋中国・韓国合同隊によって初登頂され、97年春に日本隊が登頂しています。ルートは既登の南面を予定していますが、隊員の協議によって変更される場合があります。

記

1. 期 間:1999年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負担金:85万円
4. 切り:定員になり次第

ニンチン・カンサ（7,206m）

ラサから半日行程の所にヤムドク・ツォと呼ばれる大きくて美しい湖があります。その湖を見下ろすようにそびえているのが名峰ニンチン・カンサです。日本隊は既に3隊が登頂に成功しています。ラサからゆっくりと入山し、登山期間は26日間を予定しています。

H A Jの登山隊は全てガイド登山ではありません。自己責任を認識して登山隊を構成します。

記

1. 期 間:1999年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負担金:85万円
4. 切り:定員になり次第
5. 申し込み:H A J事務局まで

表紙写真

クーラ・カンリⅡ登山の初夜は、ロザジュン・チューの上流「曲措」で迎えた。眼前に雄大なクーラ・カンリがあり目を奪われるが、招待所から目を西に転ずると、ブータン国境のテーブル・マウンテンに連なるサイチュディ・カンリ（6,814m）らしき山群を見ることが出来た。（山森 欣一）

ヒマラヤ No.322

1. カラコルムの“絹の路”を辿って ポール・ハリス
8. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・Books〉
12. INTER NET〈1998春のエヴェレストでの出来事〉
14. ヒマラヤ登山遭難事故〈ネパール・ヒマラヤ編(1)〉
20. 中国高峰登山15年小史(19) 西藏その5
24. 事務局日誌

カラコルムの“絹の路”を辿って

ポール・ハリス

ジッパーのとれてしまったフライシートを開けると、湯気の立っている紅茶のカップを片手にタシがにっこり笑いながら立っていて、楽しそうに調子外れの歌を歌っていた。一頭のポニーを蹴り続ける、これが彼の毎朝の儀式になっている。そのポニーは、しょっちゅう綱にからまってしまうやつだ。私は、半ば強制的に上方の岩場の牧場に引っ張っていかれた。タシは歌いながらポニーへ荷をくくり着けた。前日の午後、シャイヨーク川上流の断崖の上に幕営した時、私はラバ追いのチェワンとタシが彼らのボロボロのパラシュートテントの中でバターロティを作るのを見たが、芸術的な料理の腕前ではないにせよ、我々はまともな料理にありつける、という結論に達した。

その隊商の足跡を我々は追ってきたが、勇敢な彼らは、この事が必要である事を分かっていたに違い無い。なぜなら、ヒマラヤを横断する危険な旅にそなえて彼らは、レーやカシュガル市場で必要な品々を集めていたのだから。

幾世紀にも渡って、商人や旅人そして巡礼者が、ラダックと中央アジアを結ぶ伝統的な路を利用していた。彼らは、北インド平原と広大で標高の高い西チベットやトルキスタンとの間の交易を生活の糧としていた。19世紀には、その路はまるで帝国建設のための水道のような溝になっていたが、近年では辛うじて少数の登山隊に利用されているのみである。

西部ヒマラヤの交易の歴史を研究しているアミタ・サティヤル女史は、我々の隊が、かつては夏の主要なシルク・ロードであったレーから中印国境のカラコルム峠に至るルートを進む目的で、上部ヌブラ谷並びにシャイヨーク谷の制限地域に入域できるように尽力してくれた。

サソマからサセル峠へ

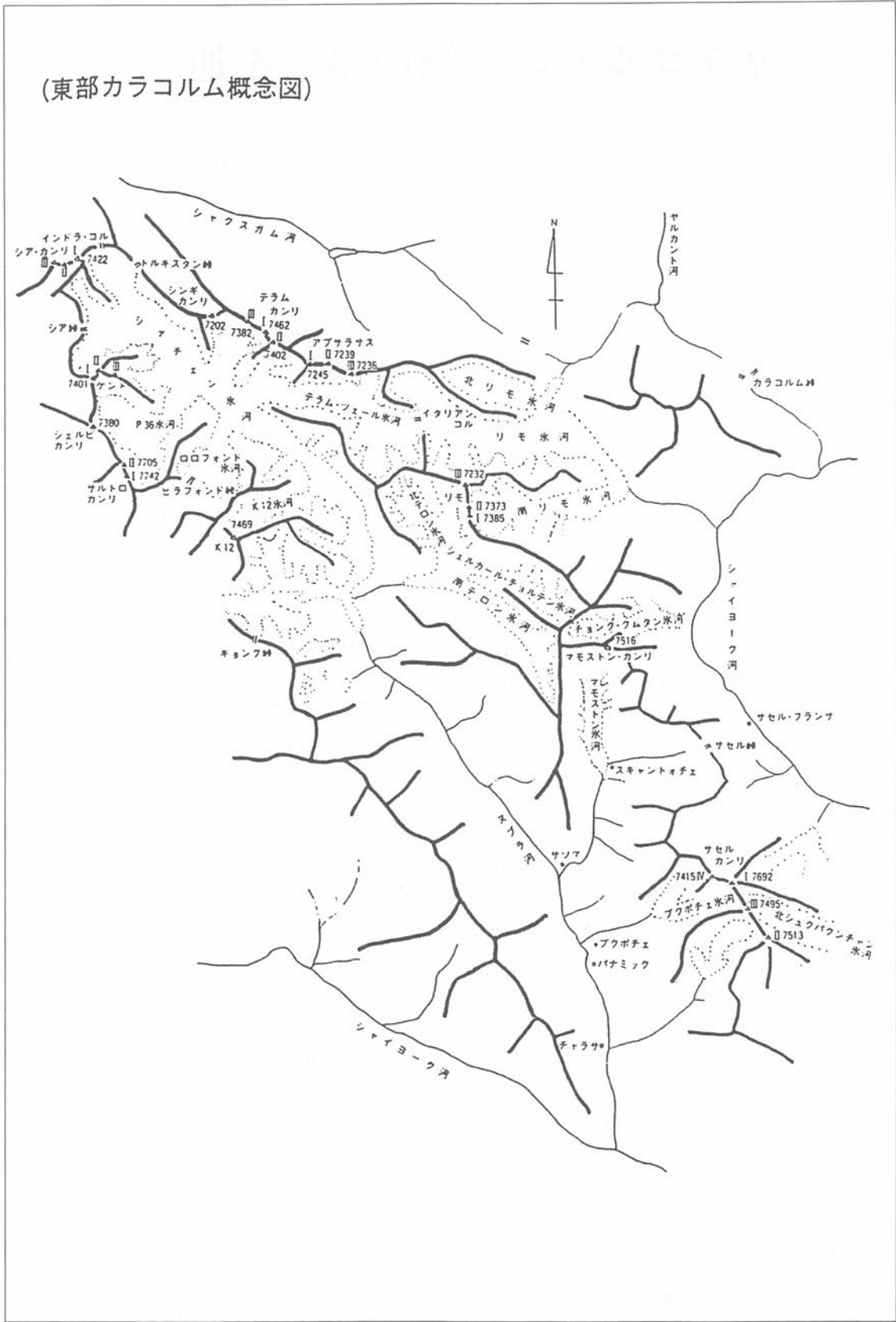
馬8頭の我々の小さな“隊商”は、レーからの長いでこぼこ路をカルドゥン峠(5,362m)を越えてサソマ(3,000m)に集まった。カルドゥン峠では、2名のラダック偵察兵、ブンチョクとトゥプタンが我々と合流した。我々の出発直前に、落日が傾斜のきつい滑らかな花崗岩のスラブや、我々の入域口のトゥルムプティ川上流のピナクルを赤く染めていた。私は、1909年のロングスタッフ隊が体験したように、私たちの旅が8月の長雨で妨げられることのないようにと願った。

朝日が暖かく、トゥルムプティ峠まで3時間を要した。古の踏跡がゴルジュ内へと下降しているが、300メートル上で陸軍が新しく道を作るために発破作業をしているので、危険でその踏跡を進めることはできない。我々は仕方なく旧道と交わるまでの凡そ2キロを、川の近くの水で侵食されてできた凹みの中に彫られた岩絵を捜すために、川沿いに進んだ。馬に乗った人間が、弓矢を手にアイベックス狩りをしている姿が鮮明に描かれており、彫られた年代を特定することが難しい。しかしながら、ラダックの他の地では、彫られた年代が紀元一千二百年まで溯っている例もある。

午後早くに、我々は、傾斜のきつい侵食された礫岩の崖を乗り越えてゴルジュを抜け出し、平らな牧草地のジンモチェ(4,200m)にとび出した。我々はジンモチェの巨大な花崗岩の大岩が点在する中で、最初のキャンプを張った。キャンプ地の中を小さくてきれいな氷河の水が流れているが、タシとチェワンが米を炊きダールを調理し、アミタが彼女自慢の“100kmのお茶”を作る夕方の早い時間には干上がってしまう。

翌朝、我々は北側の山頂に広く開けたトゥルムプティ川の薄氷が張り滑る大岩の間を恐る恐る横切った。野性のバラが巨大な花崗岩のスラブの麓に密集していた。東側に500メートルもの高さの

儿个概念图)



岩塔が素晴らしい岩の建築物のパレードのように連なっている。北側と西側には、マモストン・カンリ山群と南テロンの山域が鎮座し、我々は、沢山の石塚を頼りに流域に沿って北東に5キロ溯って横断を続け、スキャンポチェの牧草地に出た。

スキャンポチェ(4,600m)は、“野性のロバ”を意味するが、谷を降りて来る好奇心旺盛なゾウの牧夫に会っただけである。川を横切っているマモストン氷河からの巨大なモレーンの末端のせいで、我々のキャンプは余計小さく感じられる。

8月11日、我々はスキャンポチェを発ち、トゥティヤイラクへ緩やかに登り出した。すると、速く動いたためか高所の影響を感じ始めた。北にある後退しつつある氷河やモレーンが、サセル・カンリ・マシフが南東に広がっている事を最初に示してくれた。

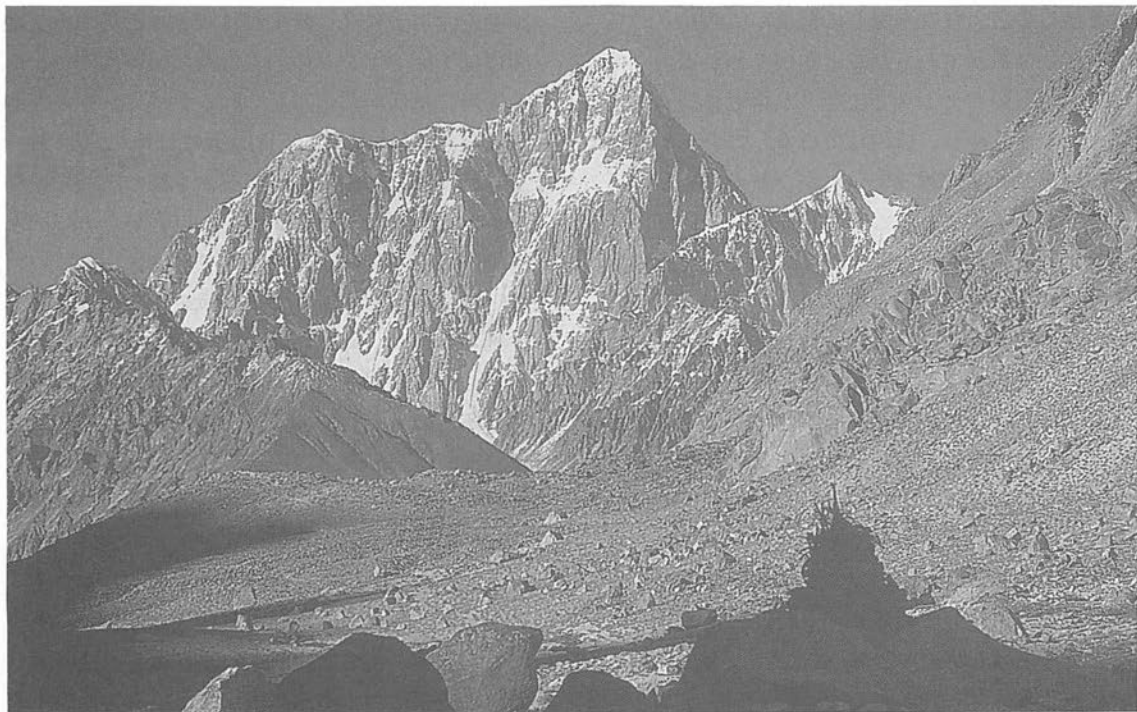
トゥット・ヤイラク(4,750m)は、“ボングロチャン”又は“ロバの骨の散らばっている所”として有名である。このあたりでは中央アジアの呼び名とラダックの呼び名の二通りの呼び名があるのが普通である。キャンプサイトは窮屈で岩だらけの場所だったが、サセル峠まで3キロ足らずである。サセル・カンリ山群末端北側から幾つかの

氷河が合流してきており、そのためキャンプの周辺には小さな氷河湖がいくつもあり、そこから峠へは登りとなる。

11日の夕方、アミタに高山病の兆候が現れた。翌朝までに回復しない場合には、スキャンポチェに引き返すことにした。朝になっても、アミタの体調は、トゥット・ヤイラクまで引き返せるまでには回復しなかったので、サセル峠を越える事にした。

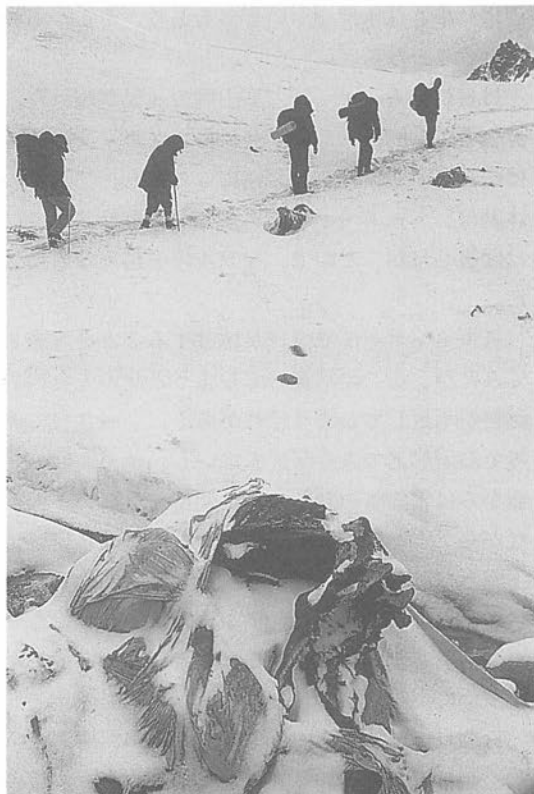
スキャンポチェで幾日か休養することを考慮してみたが、ここで消費してしまうと此の先食料や燃料が不足してしまう恐れがある。2～3日の休養で高所順応できる保証もないし、サセル峠の北側からは緊急時の救助の手は期待できない。嫌々ながらアミタは、隊が計画を続行するなら自分は下降しなければならないと決断した。勿論我々は皆とてもガッカリした。アミタはトップサンとサソマへ引き返して行き、隊は同じ日にトゥット・ヤイラクに戻った。

日暮れには、身を切るような西風が雪をもたらし、明け方までに30センチ近く積り、サセル峠のモレーンの歩き始めは寒く、足元は滑りやすかった。5,395mの峠の上までは、3時間を費やした。



▲ジンモチェのキャンプから望む

▼サセル峠への登り



最後の500メートルは別の氷河の突端部や鋭い氷塔を横切った。骨や頭蓋骨の散乱した様子からすると、この広大な吹き曝しの鞍部が隊商にとってのかなりの難所であったことが良くわかる。

ヌブラ谷のパナミクで出会った古老の商人ソナム・ワンギャルは、普段はできるだけシャイヨーク川の奥深くまで遡っていたが、数えきれないほどサセル峠を越えたことや、世話をしている馬を失ってしまう心配をいつもしていたことを思い出していた。

サセル峠からデプサン峠へ

最初はサセル峠から氷河の端に沿って下降していたが、我々はじきにシャイヨーク谷のサセル・ブランサ（4,625m）へと下降している長く骨の折れる不安定なガレ場にでくわしてしまった。川の丁度対岸のロング川のゴルジュの狭く黒い入り口が我々の予定しているルートだが、水の流れが速く徒渉が難しいので、我々は3キロ上流の別の場所からガラリへ向かった。

シャイヨーク川上流の小石の砂利で盛り上がり

た河原でキャンプをし、翌朝吊籠で高く確保されて4つの流れを渡った。谷の源頭では、シャイヨーク（文字通りに“死の川”）は、薄い水をまとった大聖堂や説教壇状の赤い岩々に立ちばかれて、泡立つ濁った渦巻のゴルジュへと殆ど直角にわん曲していた。1929年、チョム・クムダン氷河の氷河湖の決壊による大洪水がシャイヨーク谷で発生した。

この大洪水は、遥か遠くバルティスタンのスカルドに至るまでの距離を洗い流した。

北の川岸に沿って戻り、我々は、ロング川のゴルジュに入った。ヤルカンドの商人たちは、このゴルジュを“80本の流れ”と呼んでいた。我々は、チョンタシュ平原へと東方に続いている狭い滝と急峻な踏跡に到達する前に、高く黒い泥板岩や石炭期の岩壁の間の流れを30回近くも徒渉をせねばならなかった。（これは、ゴルジュの上の道の代替りの道で、増水期には現在も利用されている）

道はこの先10キロで少し高度を上げ、それから谷はいままでより広くなり、我々は、徐々にチョンタシュ（石の場所の意）に下降していった。西側には谷を囲んでいる褐色や赤色の断崖の上方にマモストン・カンリが聳えており、東側には中印国境方面に更に高い峰々がはっきりと見える。地図にはチョンタシュの近くに湖の印があるが、その場所には僅かに塩が見られるだけで、湖の痕跡はない。（H J 編者註：1989年には件の湖はあった。われわれはその湖でボートを楽しんだ）

かつて商人たちの交易所として利用されていた場所に、現在は陸軍のキャンプが設けられていた。隊商は、レーから運んで来た荷をこの地から2キロ先のムルゴ（4,450m）に降ろし、サセル峠を越えてレーに戻った。ムルゴは、このルートの夏道と冬道の分岐点である。中央アジアの商人たちは、Kalmukiaの馬に荷を積んで北のカラコルム峠へ向けて進み、更にヤルカンドやカシュガルまで旅を続けた。

インドの独立記念日には、チョンタシュでキャンプしており、ブンチョクが作った最高のバターロティとキールでお祝いをした。東方へ進み続けて、1993年にアミタが冬道沿いに二つの踏跡を発見したアップパー・シャイヨークへと入った。今世

紀の初めに、英国陸軍駐屯部隊が現存する冬道を補修して、不安定な斜面上に夏道を開拓しようと試みたが、それは実現不可能であることがじきに判明した。

我々は、ムルゴから北へわけ入り、カロン・チュミックと呼ばれている“包まれた”高原に入り口を覆われた狭い峡谷、ブルツェ・ロンゴ川へ入った。温泉が、西端から螢光を放つ緑色の藻の中を澄んだ小川となって流れ、乾いて剥がれやすい土壌を横切っている。幾人かの年老いたヌブラの商人たちは、カロン・チュミックが隊商の重要なキャンプ地の一つであり、長期滞在にはおあつらえ向きの場所である事を身をもって知っていた。

数日の間に、その理由がはっきりした。牧草を喰んでいる数頭の家畜が見られ、ムルゴの“地獄への入り口”を過ぎると、植物の疎らに生えた不毛の赤茶けた風景となった。道は東方へ向きを変え、再度時々峡谷の透明な流れに岩を落としている、赤色岩の混じったガレ場の斜面を横切った。その場所では、野バトが穴から穴へと飛び交っていた。我々がドッシリした礫岩質の大岩で塞がれたゴルジュの端まで行った時、本来の路の微かな踏跡が南側の断崖の上方に見えた。

大岩だらけの“庭園”の先は、二日間ほど平坦な道が続き、ブルツェ・ヨンマとブルツェ・ゴン

マの荒れ果てた小屋を通り過ぎて谷はまだ果てしなく続いていた。遂にクィジル・ランガー（4,800m）の小さなキャンプで谷は終わっていた。このような谷を流れる水は、普通は午前中は澄んでいるが、日中雪が解けてもたらされた沈泥のために、徐々に褐色に変わってくる。高さや褐色の断崖、近づきにくい洞窟それに川底の色とりどりの小石が、超現実的で魅惑的な風景を型造っている。

ブンチョクは、しょっちゅう踏跡で立ち止まり、険しい山の犠牲者たちがどっしりした一枚岩に変身させられてしまったと云う独特な岩を示しながら、神話の神々の大戦について説明した。ブンチョク独特の雰囲気、ずっと履き続けている硬いコフラックの登山靴に現われていた。彼にはメダル数個を授与するに値するし、さぞ素晴らしいたこやまめがいくつもできたであろう！

8月18日、我々は別の褐色の峡谷から出、デブサン峠（5,420m）に登った。この広大な褐色の高原は、かつて完全に水中に没していたが、今や数百平方キロの広さを誇り、西はリモ山群を含み、東は中印国境に達し、生物の気配は全く感じられない。それでも、隊商の通った証は至る所に見受けられる。道傍に散らばった白く漂さらされたラクダの骨や馬の頭蓋骨が、私を少し不安にさせた。人間もラクダや馬と同様に、この路上で随分命を



▲デブサン高原の“骨の路”

落としている。ヤルカンドからレーを目指した馬方たちは皆、(埋葬する死体を包む) 白布を携えていたと云う。

1889年、カシュガルを目指したフランシス・ヤングハズバンドは、デプサン高原について「郊外の別荘への草木のない砂利の散歩道」と記述している。

1907年冬にこの路を通っているもう一人の偉大な探検家スヴェン・ヘディンは、「ボーン・トレイルー骨の道」の証人である。幾頭かの馬が競争馬のようにひっくり返って脚を開いて横たわり…また、別の馬は奇異なけいれんを起こした。しかし殆どの馬は、奮励努力した跡に休息するため気を落ち着かせていた時に、突然死に捕らえられたかのようなようだった。…世界のどこかに「悲しみの道」の名に値する道があるとすれば、それはこのカラコルム峠を越える隊商の道である。まるで巨大な溜息のブリッジのようである。

死と苦難は、この路沿いの交易とは切り離せないものとなっている。動物の死骸の傍らに品物が散在し、それを拾う者も滅多にない。凍傷にかかった旅人たちは置き去られ、食料が不足した者たちは、絶望の余りに、最後の手段として靴の皮革部分を茹でたり焼いたり嚙んだりしてみた。当時の散文詩にこんなブラック・ユーモアがあった。

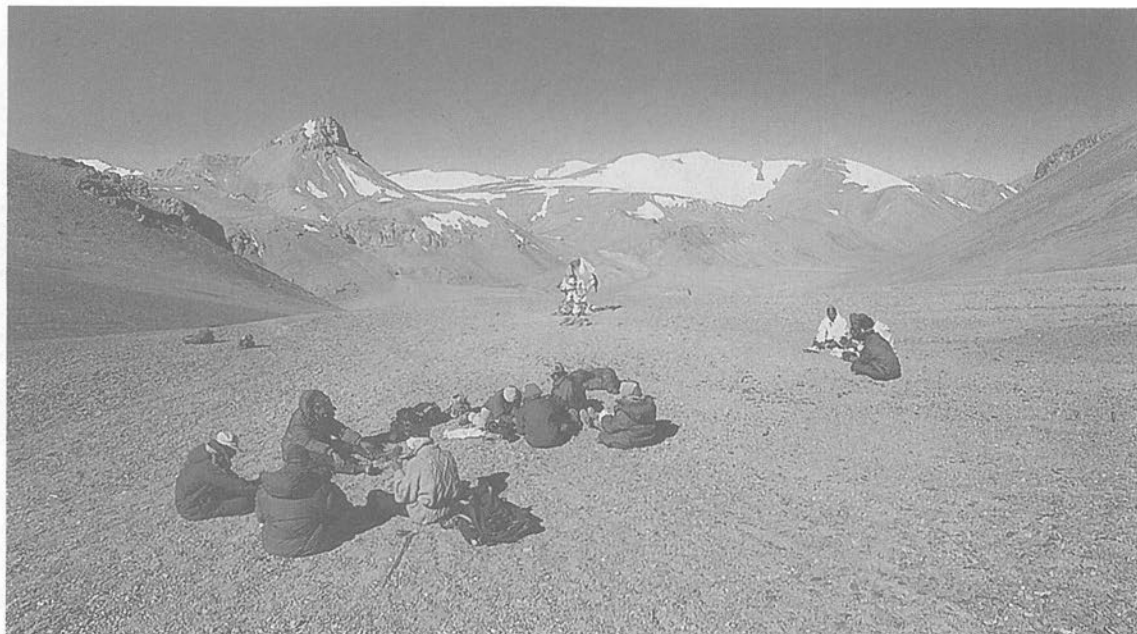
大きく開いた深い淵の上方で
彼はヤクを渡らせようとしている
だけどヤクは突然くしゃみをし
彼は来た路へ吹き飛ばされた

カラコルム峠へ

満月のチプ・チャブ川上流のダウラト・ベグ・オルディ(4,990m)の絶壁の上に設営したキャンプを照らしている。カシュガルの統治者としてダウラト・ベグ・オルディは、幾度かラダックを経由してチベットの侵略を試みたが、1532年にこの地で死亡し、埋葬された。

カラコルム峠を目指している間中、死者のためのトーテムは私の脳裏から去ることはなかった。1995年の地震により出来た大地の裂け目から電光が走り、谷が狭まり逆風が強まり、古い小屋の周りにほこりを舞い上げている。突風が吹くと、どんどん増えてきた散乱した骸骨のような亡骸の空洞から、調子はずれの音が流れてきた。我々は、峠への最後のキャンプ地であるチアジョジルクェに近付いた。私は、流れの遥か彼方でbharal鹿が4頭、不毛の斜面を横切り走るのを幻想のように見つめていた。

チアジョジルクェは、私がレーで会ったイスラム教徒の老商人ハジ・ベナレスの思い出の中では



▲カラコルム峠頂上 中央が馬の頭蓋骨を吊した旗さおとオボ

特に際立っていた。彼の父は、此の地で沢山のヤルカンドの友人の旅の始めをもてなした。彼はまた、彼のチャンタン高原を通してラサへ行く旅と比較してさえ、この路が如何に過酷な状態かという印象を与えた。

我々が峠を目指した8月20日の明け方、突然無風状態になった。私は、ブンチョクがコフラックの登山靴で花崗岩の硬い地面を自信一杯に闊歩するのを見てたじろいだ。峠まで2時間の道程だった。最後の二百メートルほどの登りは幅広い急なガリーとなっていて、黒色の砂利だらけの鞍部へと続いている。そして、比較的平凡な中国の風景が眼前に広がった。

カラコルム峠(5,575m)には、峠の標として石で囲まれた素朴な“オボ”と、木の旗さおに馬の頭蓋骨が吊るされてあった。連絡官のムトゥプ、ブンチョクそれに私は、悪鬼やここに至る路上に眠る靈魂の怨霊のために、タルチョーの一連を織ってこの不気味な“彫刻”を造った。仏教徒のムトゥプは、“キー、キー、ソー、ソー、ラルギャロー”と何度も唱えた。

アンドリュー・ダルグリーシュと云うスコットランドの商人が準備不足だったことは、頻繁に行われていたカラコルム峠越えの旅や犠牲となった諸々の生命が証明している。1883年、中国の許可でトルキスタンに住み商売をしていた彼は、ヤルカンド人と結婚していた。彼は中央アジア交易会社の主要な調査官であったが、同時に“グレート・ゲーム”の中で、政治的経済的な情報を収集するために、この地域内を巧みに動き回っていた。

1888年、ある旅の途中に、彼はカラコルム峠の近くでキャンプ中、他の隊商に同行していたカッカル・パタン(アフガン)に襲撃され、テントの中で首を切り落とされて死んだ。

中国側から誰かこの峠に来た証拠に、オボの上に桃の缶詰が一つ置かれていた。我々は、当然それを食べ、お返しにチョコバーを置いた。峠を越えてからもう5～6日になるが、カシュガルまでの中国の最初の村落にまだ着かない。

我々は、ダウラト・ベグ・オルディから東に方向を変え、チブ・チャブ川沿いにシャイヨーク川に出てサセル峠に下降しようと思ったが、8月初

旬の増水期なので踏跡の殆どは洗い流されていた。

ツェンパの塊と干しアンズを持って、紺碧の空の下デブサン高原を来た路を引返したが、我々の“隊商”は、一文の得にもならないのに生命の危険に晒されていたのは確かだった。19世紀半ばの交易路の往来が最も激しかった頃には、一万頭の馬が、新疆からパンジャブやスリナガル方面へ絹や茶、貴石や宝石それにカシミアの布を、カングラ丘陵からは綿製品や皮革、毛布や香辛料そして最も儲かるアヘンを積み、行き来していた。

トルコ石は、今やレー、スリナガルそれにカルカッタのバザールでは雑然と並べられている。我々は、ヌブラ谷で独特な頭飾り“ペラク”にトルコ石が縫い着けられているのを目にしている。私は、その石の一つ一つがヒマラヤ越えの危険な旅をしてきた事を想像した。

サセル峠を越えて戻る頃、雲が低く垂れ、この旅で二度目の雪が降ってきた。下降中雨が降り続き、ロック・ピナクル群やジンボチェの下方の岸壁は厚い霧のヴェールで覆われていた。私は、1869年8月にこの路を旅した者にも、この天候の変化は都合が良かっただろうと想像した。

スパイの容疑をかけられた、ペシャワールのイスラム教徒バンディット“ミルザ”は、カシュガルから辛うじて脱出し、メッカへの巡礼者“カフィラ”に混じった。インド測量局に雇われていた彼は、2年間に渡るヒンドゥ・クシュ並びにパミール横断の記録を提出するため、デラ・ドゥンに戻るところだった。我々は、かれの旅のほんの僅かな部分を完踏したにすぎない。しかし、このような困難な旅に臨む精神は、未だ衰えを見せず健在である。

(H J. vol.54より訳出)

HAJ刊「東部カラコルム」在庫あります。ご希望の方はお問い合わせ下さい。送料込み2,240円。

地域ニュース

《ネパール》

チベット登山隊がカンチ登頂

八千メートル峰14座登頂を目ざしてネパール入りしたチベット登山隊は、5月9日11時20分にカンチェンジュンガ主峰の登頂に成功した。ルートは南西の通常ルートにとられた。登頂者はダチョ、ツェリン・ドルジ、ジャブー、アカプー、レンナの5名である。この結果ツェリン・ドルジとレンナは9座登頂者となった。登山隊は秋のシーズンにローツェを予定している。

《インド》

ニュギェ・カンサン初登頂にクレーム

本紙299号にて紹介した、1995年秋期IMF隊によるニュギェ・カンサン(6,983m)の初登頂に対して、ヒマラヤン・クラブが疑問を呈した。同隊の記録は、ヒマラヤン・ジャーナル52号と、インディアン・マウンティニアーズ31号及び32号に掲載された。

ヒマラヤン・クラブのJ. C. ナナヴァティ氏が、同隊の写真などから同定したところによると、登頂したのは6,983mの山頂ではなく、頂上から約1.25km離れたニュギェ・カンサン北東稜上の約6,400mのコブであろうと思われるとの事。また、頂上で撮影したという写真には、後方に“頂上”が写し出されており、これによっても同隊が頂上に到達していない事が明らかであると云う。

ナナヴァティ氏は更に、登山隊に対して以下の疑問を呈している。

1. 登頂者三名はカメラを持参しており、一名はコルから頂上往復で、2ロールの写真を書しているし、他の二名も頂上で15~20枚写している割には、写真はわずかに2枚しか公表されていない。また、ビデオカメラも頂上まで持参されていると云うが、これとて人の目に触れていない。
2. 登頂チームは、アタック当日(1995年10月23日)

地図もコンパスも高度計も持参していない。

3. 同隊による山座同定には、隣接しているチョモ(6,878m)を6,425m峰としているなど大きなミスがある。実際には、6,425m峰はニュギェ・カンサン南西稜上の小さなコブに過ぎない。ヒマラヤン・ジャーナルに掲載された6,319m峰の同定にしてもまた然りである。
4. アタックは、C3から行われている。C3の標高は、登山隊の記録や地図によると、5,800mだったり6,000mだったり表記がバラバラになっているが、実際には約5,400mである。
5. 登頂者による登頂報告が全く無く、重要な登頂に至る技術的な過程の記述も無く、隊長自らの手による報告しか発表されていない。

ニュギェ・カンサン(6,983m)は、アルナチャル・プラデシュ州とチベットとの暫定国境となっているマクマホン・ライン上にある未踏峰。旧標高は7,047m(IMFは7,050mを採用)で、数少ない未踏の7千メートル峰の一つとして注目されていたが、再測量の結果6,983mと64m標高が低く訂正された。1993年、HAJ/ITBP合同隊が同峰への登山隊派遣を計画していたものの、マクマホン・ラインをめぐる国境問題でインド外務省及び内務省が難色を示し、結局シッキムのピラミッド・ピークへの転進を余儀なくされた経緯のある山である。中国名トゥイ・カンリ。

《パキスタン》

シルバートートル隊GⅡ登頂

ガッシャーブルムⅡ峰(8,035m)を目指していたシルバートートル登山隊(池田錦重隊長以下15名)が、7月22日、同峰の登頂に成功した。

登頂したのは第一次隊の石川富康(61)、渡辺玉枝(59)、根津皖一(58)、森山勇(58)の4隊員。登山は続行中なので更に登頂者数は増える見込みである。

石川氏は50歳を過ぎてから八千メートル峰を目指し、今回のGⅡで6座目の登頂となり、日本人八千メートル峰最高齢登頂者となった。渡辺さんも日本人女性最高齢登頂者となった。

《中国》

中国・カザフ国境最終画定で合意

カザフスタンを訪問した江沢民中国国家主席は、アルマトイでナザルバエフ大統領と会談し、両国の国境線を最終的に確定する協定に調印した。これにより、旧ソ連時代から難航してきた両国間の国境問題は決着した。

タス通信によると、今回合意に達したのは、両国間で最後まで未確定だった東カザフスタン地方のバイムルザ峠周辺と、アルマトイ地方のサリチャルディ川周辺の国境地帯。

ナザルバエフ大統領は調印式後、「これで千七百キロにわたる両国国境すべての問題が解決した」と述べ、江主席も「両国間の国境が友好の国境となり、両国の協力を強化するものになるとのナザルバエフ大統領の考えに同意する」と発言、全面解決を強調した。

今回の合意は、両国にロシアとタジキスタン、キルギスに参加して開かれた五ヶ国首脳会議とは別の二国間交渉にもとづくもの。(東京新聞7.5)

洪水死者千人超す

18日付の中国英字紙チャイナ・デーリーによると、中国南部を襲っている洪水被害による死者が全国で千人以上に達し、経済的な被害は約八百五十六億元（約一兆四千五百億円）に達したことが分かった。

中国民生部が今月15日までに被害をまとめたもので、被害は湖南、湖北、江西、四川、福建など10の省・自治区にわたり、被災地の穀物生産高の3割以上にわたる九百万ヘクタール分の穀物が失われた。

長江（揚子江）南部の被災地域では、6月から記録的な豪雨が続き洪水被害が深刻になっている。

(東京新聞 7.19)

愛媛大学隊がカンペンチンへ

愛媛大学山岳会は、1982年京都大学によって初登頂された、シシャパンマの西にあるカンペンチ

ンを目指して登山隊（山本武隊長ら6名）を派遣した。主峰（7,281m）の他に未踏の北峰（7,230m）も登頂する予定。日程は8月2日～9月13日。

京都岳連隊がラブチェ・カン山群へ

京都府山岳連盟では、創立50周年を記念して、チベットのラブチェ・カン山群の未踏峰へ登山隊（栗飯原一成隊長ら7名）を派遣する。ラブチェ・カン主峰は、1987年H A Jとチベット登山協会の合同隊によって初登頂され、その西にある7,072m峰は95年スイス隊によって登られている。京都岳連隊は主峰の東にある未踏の7,100m峰を目指すもので期間は8月下旬～10月20日。

野菜も手に入れやすくなったチベット

平均海拔4,000m以上の高原で暮らすチベットの住民にとっては、野菜はこれまでかなり入手が困難で、冬と春になると野菜の供給不足はいっそうひどかった。そこで、野菜の生産が自然の気候に左右される状況を改めるため、チベットの技術者は十数年の努力によって、前後して野菜のビニールハウス栽培を、高海拔地区での栽培など50余りの研究成果を収めた。これによって、夏と秋に野菜類が栽培できなかった歴史に終止符が打たれ、野菜の年中の栽培と出荷が実現した。

野菜の栽培技術の普及にともない、各都市はその近郊の野菜商品基地の建設に力を入れ、ラサ市を中心とする相当な規模の野菜商品基地が十カ所つくられ、野菜畑の面積は1,200ヘクタール、年間収穫量は1億キロに達し、主要都市の野菜自給率は75%になった。

いま、ラサ市の各大型農業貿易市場には、毎日新鮮な野菜が数十種類も出回り、副食品もかなりそろっており、一人あたりの一日の野菜供給量は250gに達し、一人あたり野菜消費の年平均伸び率は11.8%になった。(北京週報 1998.No.26)

トピックス

H A J 合同壮行会開催される

恒例のH A J 合同壮行会（ニンチン・カンサ、

ラモ・シェ、カバン偵察)は、三隊の家族や友人約140名が参加して、東京、池袋の「かんぽヘルスプラザ東京」を会場に7月11日午後6時から開催された。

来賓の斎藤惇生氏(日本山岳会々長)のご祝辞のあと、三隊の隊員紹介が行われ、斎藤義孝氏(日本勤労者山岳連盟副理事長)のご発声で乾盃が行われ、各テーブルでは隊員を囲んでそれぞれの山を話題に話が弾み、盛大裡に壮行会は終了した。

「韓国ヒマラヤ登山史」の出版と 韓国ヒマラヤニスト達

1998年5月山岳雑誌「人と山」社から出版された韓国のヒマラヤ関係の登山史である。

韓国でネパール・ヒマラヤに最初に出かけたのは62年、朴鉄岩先生(Profeser Park Kyung Hiu)で、この5月末に長年にわたりまとめられた「チベット花と風物写真集」が発刊された。その朴先生のダウラギリⅡ峰偵察隊が韓国初めてのヒマラヤ行きであった。続いて69年再び呉仁喚(Oh in Hwan)とチューレン・ヒマールへ偵察に出かけた。

韓国岳人が最初にヒマラヤ登山に出かけたのは70年春のチューレン・ヒマール東峰であった。カペ氷河からダウラギリⅣ峰の西面をトラバースした。というが登頂には疑問が残っているのが残念ではある。続いてローツェ・シャールとマナスルであった。マナスルの金、三兄弟の翌年に引き続いた遭難、同隊に参加していた写真家、安久一成氏の遭難はセンセーショナルな事故として記憶に残る。が韓国最初の遭難事故でもあった。

70年代には外貨取得の問題で毎年1隊が出たに過ぎないが、77年サガルマータに Mr.Ko Sang Ton(高相敦)という登頂者が出て、韓国の岳人のヒマラヤ熱は一気に増した。

80年代に入り毎年、数隊が出るようになり、経済の高度成長期を迎えた80年代後半にはヒマラヤ登山熱と外国旅行、外貨枠の自由化の波にのり益々外国登山が活況となり、私達をうらやむ。すばらしい勢いで、若い人達によるヒマラヤ登山がなさ

れた。

この本はその輝かしい韓国ヒマラヤニストの動きと記録をかいまみれる本である。カラー写真も綺麗だし年表、各峰の登頂記録なども列記されていて、編集者南君がこの10年、緻密にまとめた韓国人によるヒマラヤ登山概要と登山史である。全てハングルで書かれていて私には理解が出来ないのが残念である。

この6月初旬、Seoulで韓国ヒマラヤクラブの若い人達と会う機会があった。Mr.Ko in Kyung 高仁郷会長(55)(93チョモランマ、94南極縦断、95アンナI峰、98アンナI峰隊長)宅で催されたパーティでは、Mr.Oh in Hwan(51)(ヒマラヤ286号参照)、Kang Ho Ki(57)(93サガルマータ女性隊、95高麗大チョモランマ隊長)、Kim T-ae Soup(56)(95/96タウチェ日韓隊)、Heo Young Ho(44)(83マカルー、87サガルマータ冬季、93チョモランマからネパール側へ、94南極点、95北極横断など他ネパールヒマラヤ多数)、Nam Sun Woo(44)(88サガルマータ、95チョー・オユー、シジャパンマなど)、若手のUm Hong Gil(39)現在8,000m峰10座登頂、今春アンナプルナI峰で頂上直下でスリップして複雑骨折、下降後ヘリで救出され現在治療中。(岳人585号)、Park Young Seok(36)8,000m峰8座、現在ナンガ・パルバットへ登山中。97年春から98年春までの全シーズン挑戦して、連続6座登頂中でどこまで記録を続けるのか? Han Wang Ryong(30)エヴェレスト北東稜など8,000m峰5座、この春アンナプルナI峰登頂。Hong Young Ki(32)チョー



▲訪韓団と韓国ヒマラヤニスト達

・オユー、シシャバンマ、Hong Seoung Taek
95チョモランマなど。

沢山の8,000m峰登頂者と会って友好を深めた。我々は住吉仙也大兄を筆頭に会社の連中と我が家族で、全員がカトマンズ、ソウル、大阪で何度も会っているメンバーであった。若手の彼らに「何でそんなに急いで8,000m峰ばかり、ノーマルルートを。それもルートが出来てから？登るの？」と尋ねた。「とにかく8,000mを全部に登ってから」と答えた。許永浩 Heo Young Ho 君も同じ事を彼らに聞いていた。そして「お金が大変よね」「スポンサーもなかなか見つからないしね」。も話題に出たのであった。

日本同様、韓国経済の苦境も大変らしい。彼らの今度の登山にも影が出つつあるのだろうか。若い彼らに家族があり、奥さん連中も大変なのはどこの世界も変わらない。お金が続く限り残りの8,000m峰に挑むという。韓国のスポンサーも急に彼らに冷たくなってきたようだし、これからは個人の遊びとしてのヒマラヤ登山をやって行かねばならない。とも言った。スポンサー探しが今後の彼らの登山に強くのしかかってきた。

二次会のビヤホールで何杯目かの生ビールをグ・グーッと呑干して住吉大兄は言った。「あんまり無茶やったらアキマヘンデ」「気をつけて登山をおやりなさい」と。

カトマンズでまた会おう！パク・ヨン・ソク君のタメールのロッジ・ピラ・エヴェレストで参鶏湯を食べつつ。を合い言葉にソウルの街中へと出て、モリアプタ（頭痛い）状態となって行った。

（大西 保）

BOOKS

崑崙山脈7,167m峰登山報告書

1986年に東京農大が初登頂した崑崙山脈の最高峰に1997年に登頂成功した西陣山岳会隊の報告書である。一部の新聞報道や「岳人」などへの投稿である程度わかってはいたが、まず隊員構成とその若さに驚いた。BC要員3名を含む18名の隊員の内、12名が女性。平均年齢は30.3歳である。登

山隊員だけでは実に平均年齢27.8歳と言う若さだ。そして登山隊員の内1名がACで脱落しただけで、実に14名（女9人、男5人）の大量登頂を果たした。同時期に多くの登山隊が入る山で、高所ポーターを使った登山が主流の日本のヒマラヤ登山の現状からすれば、快挙と言っても良い。

山岳会の創立35周年として行われたこの登山は、5年前（30周年登山）の雪辱戦であるが、隊員の平均年齢からもわかる通り、大半のメンバーを入れ替えての挑戦となった。

報告書には行動記録から各係の報告、登山を終えての感想や、サポート隊（BCには行っていない）の報告などがまとめられている。

遠征前には会でドクターを招いての蘇生法（心臓マッサージ・人工呼吸）や高所医学の講習会をもち、メンバーの育成のために冬山の経験を積ませるなど、とにかく真摯な姿勢が報告書の随所にみられ、隊員一人一人の自覚を促していこうとする会の方針のようなものが伝わってくる。武道研究会やツアー会社を外郭団体として持つという会であるようだが、単なる山岳団体だけではない何かを感じる。それがこれだけの若い人を引き付ける理由なのだろうか。

登頂を断念した隊員の文章の冒頭に「どこまでいっても山は自己責任だ。リーダーが許可したからといって、結局はすべて各個人の責任だ。」とある。多くの人に考えてもらいたい言葉だと思う。B5版カラー写真2枚66ページ。もう少し多くの隊員の言葉がのっていただくと惜まれる。（中川）

東京集会のお知らせ

日 時	8月31日（月）午後7時～
内 容	ラモ・シェ隊の概要報告
場 所	HAJルーム（地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分） 又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分）

1998春のエヴェレストでの出来事

ヒマラヤ登山において、インターネットが脚光を浴びたのは1996年5月10日のエヴェレストでの大量遭難からである。現地からの情報が衛星回線を通じて登山隊の母国に送られ、すぐさまホームページに公開された。サウスコル出発から登頂、そして遭難へと展開していく模様がコンピューターのモニターに映し出された。遭難のニュースが入り、情報が混乱する中で日本のマスコミの報道とホームページを照らし合わせながら事実を拾っていく作業に興奮したのを覚えている。しかし、一方では個人的な見解が大きく取り上げられたり、ホームページを持っている隊の情報が突出して、情報の精度や、公平さには大いに問題がある事が分かった。当然といえばそれまでだが、コンピューターという文明の利器をとおして、最近流行のインターネットから引き出した情報に対して不用意に信頼してしまう傾向があったのも事実だ。

あれから2年、今春エヴェレストに挑戦した登山隊の中で、ホームページを持っている隊は10隊を超えた。新しい情報がほとんど入ってこないものもあるが、中には注目すべきものがある。「EVEREST NEWS」という名のホームページには、北側（チベット側）と南側（ネパール側）両方の登山隊リストや動向が逐次掲載され、登頂者リストも整理されたかたちで公開されている。エヴェレスト登山に関わる他のホームページにも繋がっており、非常に便利だ。情報の精度もある程度のチェックをしているようで、間違いは有るが、それまでのものに比べればはるかに良くなり、情報量も多い。ネパール政府の公式発表とは多少異なるが、矛盾した情報などを出来る限り整理して、いくつかのホームページの情報を参考にしながら今春のエヴェレストでの出来事をまとめてみたい。

今春のエヴェレストの登頂者は北側が74名、南側が44名（ネパール政府発表43名）、合計118名。内北側の3名に？がついている。尚、登山隊の数

だが、一つの許可を共有しているケースが多数ある。正確な数は不明である。南側8隊（政府公式発表）。北側は18隊と報告しているものもあるが実態は不明。むしろエヴェレストでは登山隊という枠組みが変わってしまったかにもみえてくる。

北側の内訳はネパール人25名、ロシア、ウズベキスタン等の旧ソ連勢が18名、日本人15名、他には中国人やアメリカ人4名、中国人も4名となっているが？付だ。他にチェコ、フランス、インドが複数登頂したとしている。南側からは（延べ）ネパール人が23人、アメリカ人が8人イギリス人が5人。イラン隊から4名の他、マレーシア人2名とボリビア人とシンガポール人が1名ずつ。

南側では事故は無かったが、北側からは4名の遭難が伝えられている。その内の3名が登頂後の遭難である。ロシア隊のセルゲイ（39）とフランス（40）のアレセンティフ夫妻は8,200mの最終キャンプに3泊した後にアタック。5/22の20時頃（北京時間）に登頂したものと思われる。翌日8,350mで「妻はどこだ？」と言って降りてきたセルゲイとウズベキスタン隊の5名が逢う。頂上に向かった5名は第一ステップの上で倒れているフランススを見つけるが、3名はそのままアタックを続行。他の2名は彼女を助けようとしばらくとどまった後に、やはり頂上を目指した。この間にチェコ人のドクターが酸素を彼女に与えている。先の3名が登頂後、最終キャンプに戻り、キャンプに戻っていた夫に妻の状況を話すと、彼は酸素ボンベを持って妻の救助に向かった。5/24には南アフリカ隊の2隊員と3名のシェルパがアタックに向う。するとフランススはまだ生きており、南アフリカ隊は登頂をあきらめフランススを助けようとしたが、10時55分彼女は息を引き取った。辺りにはセルゲイが辿り着いた痕跡があったが彼の姿は確認できなかったという。尚フランススは米国人。

5/25に登頂したマーク・ジェニングは翌日下降中に死亡した。ロジャー・ビュイク（52）は5/27に7,300mから400mの間で雪に埋もれている姿が確認されている。両名ともガイドのラッセル・ブライスの許可で登山をした事になっているが、当のブライスは何も知らないと言っていたという。

南側からの登山隊は5月19日に最初のアタックは世界最高所でのゴミの回収を目的としたエヴェレスト環境登山隊（シェルパを含めて12名登頂。）の他、国家の威信を懸けたシンガポールやイランの両国の登山隊、エヴェレスト・チャレンジ隊では義足の英国の登山家トム・ウィットィカー（50）が義足を付けた人間として初登頂を目指し、5/26に登頂した。かれをサポートして一緒に登った米国人ジェフリース・ロード（44）とシェルパのタシ・ツェリン（28）は5/20に続き今季2度目の登頂を果たした。尚、サウスコルからは5/19の登頂を目指してかなりの数のクライマーが出発したようだが（一説には50人以上）、南峰からのルート仕事をシェルパが拒否したために皆断念したという。

さて、エヴェレストをめぐるこの春の話題は、誰が1,000人目の世界最高峰登頂者になるのかだった。朝日新聞によるとカトマンズ在住のE・ホウリーさん5/27のジェフリース・ロードだとしているが、昨年までの登頂者の数が正確だと仮定するなら（トータル931人）、もう少し前の5/22頃

の北側からの登頂者の可能性が高いのではないか。

尚、5/25日本人女性として3人目の最高峰登頂者となった続寿美代（30）はラッセル・ブライスのガイド登山隊に参加していた。ラッセル・ブライスのホームページでは来年のエヴェレスト（北稜）隊の募集がされている。1999年4月1日から6月10日までの71日間で3万5千ドルである。今年の秋のチョー・オユー（8,201m）も募集されておりこちらは8月29日から10月11日までの44日間で1万ドルである。いずれもカトマンズからカトマンズまでの期間。興味ある方はご覧になるといい。

今年の夏から秋にK2やガッシャーブルムI峰、エヴェレストに向う隊の中にもホームページを持っている隊がある。様々な公募のガイド登山隊のホームページも含めて皆「EVEREST NEWS」の関連ホームページとして紹介されている。Yahooでeverestで検索すればすぐに探し出せる。

ガッシャーブルムI峰（8,068m）登頂

ガッシャーブルムI峰にのぞんでいたデンマーク隊（4名）のホームページによると、6月1日パキスタンに入国。6月14日にBC（5,150m）を建設していた同隊は、7月9日の9時45分（パキスタン時間）北面ルートより今季のトップで3名が登頂に成功した。

今季GI峰には6隊が登山をしているという。

（文責：中川 裕）

H A J 図書と地図の販売

■図書

1. 雪の住処30年の記録 B 5判 442P 3,500円
2. 知られざる北部シッキムの山々
B 5判 82P 2,240円
3. 東部カラコルム B 5判 103P 2,240円
4. ナムチャ・バルワ B 5判 56P 2,240円
5. 天壇の山に挑む B 5判 140P 2,810円
6. 雪域神山（チベットの山写真集）
A 4判 237P 6,700円
7. ネパール登山の手引き B 5判 145P 2,310円
8. 中国登山の手引き B 5判 300P 4,200円

■地図（いずれも中国製で2,000円）

1. チョモランマ
 2. チョゴリ
 3. シシャパンマ
 4. コングルー&ムスターグ・アタ
 5. カン・リンポチェ（カイラス）
 6. ナムナニ（グルラ・マングータ）
 7. ニンチン・カンサ
- 以上は10万分の1で中文のみ—
8. 青藏高原山峰図
 9. 中国山峰一覧図
- ） 中文と英文があり つながる

ヒマラヤ登山遭難事故

ネパール・ヒマラヤ編 (1)

1905
～
1986

(対象は標高6,000m以上の山、遭難者の〔 〕内は、シェルパなど現地雇用者) ↓は登頂後遭難

No.	遭難日	山 名	標高	人数	所属	遭 難 者 名	遭難場所	原 因
1	05, 8, 下	カンチェンジュンガ	8,586	1		[ポーター]	C 5～C 6間	滑落
2	9, 上			4	スイス	A.パッヘ [ポーター3名]	C 7 6,300m下	雪崩
3	29, 8, 26	カンチェンジュンガ	8,586	1	米	エドガー・フランシス・ファーマー	タルン・コル	行方不明
4	30, 5, 9	カンチェンジュンガ	8,586	1		[チェタン]	C 3 下	雪崩
5	52, 10, 31	サガルマータ	8,848	1	スイス	[ミンマ・ドルジェ (25)]	C 5 上	落氷
6	54,	ダウラギリ I	8,167	1	アルゼ	フランシスコ・イバネス	B C 下	高山病
7	54, 5, 31	サイパル	7,031	1	奥	カール・ライス (29)	C 2 5,500m	高山病
8	54, 5, 25	ア ビ	7,132	1	伊	P.ベルト・ビニャミ (26)	移動中	転落
9	6, 15	"		1	"	ジュゼッペ・バレンギ (34)	6,900m	行方不明
10	6, 17	"		1	"	ジオルジオ・ローゼンクランツ (32)	6,700m	高山病
11	55, 5, 24	ヒマルチュリ	7,893	1	ケニア	アーサー・ファーマン		転倒
12	55, 10, 24	ヤンラ・カンリ	7,429	1	仏	E.ゴージャ	C 4～C 3	滑落 ↓
13	56, 5, 中	ダウラギリ I	8,167	1	アルゼ	[バル・バハドゥル]	5,300m	雪崩
14	57, 4, 30	レンボ・ガン	6,979	3	英	クロスビー・フォックス [ミンマ・テンジン、ラクパ・ノルブ]	C 4 上6,000m	雪崩
15	59, 4, 29	ダウラギリ I	8,167	1	奥	ハイリヒ・ロイス	C 2 上	クレバス
16	59, 5, 4	ヒマルチュリ	7,893	1		[ニマ・テンジン (31)]	C 2 5,850m	高山病
17	59, 5, 21	アマ・ダブラム	6,812	2	英	G.J.フレーザー (28) マイクル・ハリス (34)	C 4 6,550m	行方不明
18	60, 5, 3	ヒマルチュリ	7,893	1	日	[カジ]	C 1 5500m	雪崩
19	61, 5, 11	ランタン・リルン	7,234	3	日	森本嘉一 (44) 大島健司 (27) [ギャルツェン・ノルブ]	C 3 5,600m	雪崩
20	61, 秋	ブモ・リ	7,161	2	独	G.ステーブル [プルバ・ロブサン]	B C	クレバス
21	62, 4, 28	サガルマータ	8,848	1	印	[ナワン・ツェリン]	S コル下	落石
22	63, 3, 23	サガルマータ	8,848	1	米	ジョン・ブライテンバック (28)	アイス F	セラック
23	64, 4, 9	ギャチュン・カン	7,952	1	日	大滝明夫 (29)	C 6 上7,700m	滑落
24	65, 3, 27	ダウラギリ II	7,751	2	日	[ミンマ・テンジン、ハクパ・ゲルブ]	B C 前5,400m	雪崩
25	69, 4, 28	ダウラギリ I	8,167	7	米	B.エヴァレット、P.ガーハード、J.ホームマン、W.ロス、D.サイドマン [パンボチェ・テンジン、ペマ・プタール]		
26	69, 10, 18	サガルマータ	8,848	1	日	[プー・ドルジェ]	アイス F	雪橋崩壊
27	69, 11, 上	ダウラギリ IV	7,661	6	奥	R.ホイヤー (26) P.ラピカ (28) K.リン (36) P.ネメク (26) K.ハレ (21) [ニンドラ]	C 5 6,900m	行方不明
28	70, 4, 5	サガルマータ	8,848	6	日	[ミマ・ノルブ、ニマ・ドルジェ、ツェリン・タルキー、パサン、クンガ・ノルブ、カミ・ツェリン]	アイス F	雪崩

No.	遭難日	山名	標高	人数	所属	遭難者名	遭難場所	原因
29 30	70, 4, 9 4, 21	サガルマータ "	8,848	1 1	日 "	〔ギャク・ツェリン(36)〕 成田潔思(28)	アイスF B C 5,350m	落水 高山病
31	70, 4, 24	パウダ・ピーク	6,672	1	日	板屋曇男(25)	C 3 上	滑落
32	70, 5, 1	ツクチェ・ピーク	6,920	1	日	菊池裕介(23)	C 2 上	滑落
33	70, 5, 30	アンナプルナ I	8,091	1	英	イアン・クラフ	C 2	セラック
34	71, 4, 18	サガルマータ	8,848	1	印	ハーシュ・バフグナ	西稜 6,900m	疲労凍死
35	71, 5, 4	アンナプルナ II	7,937	1	日	佐藤正敏(22)	7,300m	滑落
36	71, 5, 4	ダウラギリ V	7,618	3	日	手塚英信(30) 柳沢利文(27) 青木憲一(23)	7,000m	転落
37	71, 10, 6	ダウラギリ V	7,618	1	日	千々岩玄(29)	5,950m	雪崩
38	71, 10, 16	ガンガプルナ	7,455	8	日	小木曾巖(29) 笹川広平(25) 箱山益夫(23)〔アン・ギャルツェン、アン・ベマ、ナワン・チョータル、(ギルミ・ドルジェ、ベンバ・ヌルプ)〕	C 2 5,800m ()内の2名 は17日に死亡	雪崩
39	71, 10, 20	マカルー II	7,678	1	日	高木邦夫(28)	C 2 5,830m	高山病
40	72, 4, 11	マナスル	8,163	15	韓	金楨燮、朴昌熙、宗俊行、呉世限、安久一成〔ベンバ・リンジン・ラマ、リンジ・ワンゲル・ラマ他HP 9名〕	(安久は日本人)	雪崩
41 42	72, 4, 25 4, 25	マナスル "	8,163	2 1	奥 "	フランツ・イエガー(27) A.シュリック ケム・パハドール (L/O)	B C	行方不明 行方不明
43	72, 4, 30	ダウラギリ IV	7,661	1	日	松井高重郎(34)	C 4 6,200m	高山病
44	72, 5, 5	ナンバ	6,755	1	日	高橋進(23)	頂上下	転落 ↓
45	72, 11, 14	サガルマータ	8,848	1	豪	トニー・テイゲ	アイスF	セラック
46	72, 11	ナンバ	6,755	1	日	〔アン・テンバ(31)〕	C 2 5,100m	高山病
47	72,	ローツェ	8,516	1	独			
48	73, 5, 15	ヤルン・カン	8,505	1	日	松田隆(31)	8,150m	転落
49	73, 5, 18	アンナプルナ I	8,091	5	日	高橋貞利(37) 浜正則(36) 片桐一三(23) 牛越正(30)〔チョン・リンジ〕	C 3 ~ C 4	雪崩
50	73, 6, 1	マカルー	8,463	1	チェコ	ヤン・コウニッキー	C 5	転落
51	73, 10, 8	キュンカ・リ	6,601	3	日	押谷光喜(30) 鈴木真一(25) 加藤学(22)		雪崩
52	73, 10, 12	ブタ・ヒウンチュリ	7,246	3	日	水谷勇(25) 出口光男(20)〔アン・ニマ〕	C 5	雪崩
53	73, 10, 12	サガルマータ	8,848	1	日	〔ジャンプー〕	南西壁下部	雪崩
54 55	73, 10, 中 10, 中	ダウラギリ IV "	7,661	1 1	英 "	アラン・デウィソン 〔カンチャ〕	6,500m C 1 下	滑落 雪崩
56	73,	アンナプルナ I	8,091	2	伊	〔HP 2名〕		雪崩
57	74, 4, 16	アンナプルナ I	8,091	1	奥	フランツ・テギッシャー	C 2 5,450m	雪崩
58	74, 4, 19	ダウラギリ IV	7,661	3	英	〔ダワ・ツェリン、カミ・サルキ、アン・ツェリン〕	C 1 ~ C 2	雪崩
59	74, 5, 2	ブモ・リ	7,161	2	仏	フィリップ・ベルナダン〔アン・カミ〕	頂上下	行方不明
60	74, 5, 5	マナスル	8,163	1	日	鈴木貞子(30)	C 5 下	滑落
61 62	74, 5, 5 5, 7	グルジャ・ヒマール "	7,193	1 1	仏 "	フランソワ・スブラース クリスチヌ・エストラン		滑落 ↓ 滑落 ↓
63	74, 5, 9	ヌブツェ	7,879	2	英	ゲリー・オーエンス(36) リチャード・サマートン(28)	頂上直下	雪崩

No.	遭難日	山 名	標高	人数	所属	遭 難 者 名	遭難場所	原 因
64	74, 5, 14	スプツェ	7,879	2	英	デビット・プリスター 〔バサン・タマン〕	C 7 ~ C 6	滑落
65	74, 5, 26	マカルー	8,463	1	チェコ	カレル・シューベルト	C 6 上7,950m	疲労凍死
66	74, 9, 9	サガルマータ	8,848	6	仏	G.ドヴァゾー〔ラクパ、サヌ・ワンギャル、ペンバ・ドルジェ、ナワン・ルトク、ニマ・ワンチュ〕	西稜肩6,400m	雪崩
67	74, 10, 16	マカルー II	7,640	1	オランダ	エウート・レイネシー	C 4 7,150m	転落
68	74, 12, 17	ローツェ	8,516	1	ポーランド	スタニスラフ・ラタロフ	C 3 上	高山病
69	75, 3, 25	ダウラギリ I	8,167	5	日	沼尾吉忠(25) 井村哲(23)〔バサン・カミ(20) アン・ドルジェ(21) キーパー(25)〕	C 1 4,500m	雪崩
70	75, 5, 10	ダウラギリ IV	7,661	2	日	河津士郎(31) 安田悦郎(27)	7,500m	転落 ↓
71	75, 5, 11	ローツェ	8,516	1	独	マックス・ルッツ	C 5 下	転落
72	75, 9, 26	サガルマータ	8,848	1	英	ミック・パーク(32)	頂上直下	行方不明
73	75, 10, 23	アンナブルナ III	7,555	1	伊	ルイジソ・ヘンリ(37)	6,300m	滑落
74	75, 11, 4	カンジロバ	6,883	1	日	高頭清次(28)	6,300m	雪崩
75	75,	シスネ・ヒマール	6,629	1	英	アンドリュウ・ラッセル	5,640m	雪崩
76	76, 4, 10	サガルマータ	8,848	1	英	テリー・トンプソン	C 2	クレバス
77	77, 5, 13	ヒマルチュリ	7,893	1	日	近藤芳春(33)	7,800m 下	雪庇崩落
78	78, 3, 12	アンナブルナ S	7,219	2	日	〔HP 2名〕	B C	雪崩
79	78, 4, 18	サガルマータ	8,848	1	豪	〔ダワ・ノルブ〕	アイス F	クレバス
80	78, 4, 22	ダウラギリ I	8,167	1	日	永沼勝己(33)	C 3 6,500m	高山病
81	78, 9, 14	ガディ・チュリ	7,871	3	日	牛沢守(30) 万実久次(28) 高橋美丈(23)	C 3 5,640m	懸垂氷河
82	78, 9, 23	ダウラギリ I	8,167	3	日	阿久澤廣(35) 深沢勇二郎(28) 小林清(28)	6,500m	雪崩
83	10, 21	〃		1	〃	小暮勝義(35)	C 4 ~ C 5	滑落
84	78, 10, 17	アンナブルナ I	8,091	2	米	ヴェラ・ワトスン(46f) アリスン・チャドウィック・オニシュキエヴィッチ(36f英)	C 4 ~ C 5	滑落
85	79, 4, 30	アンナブルナ I	8,091	1	仏	イブ・モラン(34)	6,900m	ロープ絡
86	79, 4, 15	アンナブルナ S	7,219	1	ポーランド	ヨゼフ・コニアク(31)	北東壁	転落
87	5, 4	〃		2	〃	イエジ・ピエトキエヴィッチ ユリアン・リズナル	北面 6,500m	行方不明
88	79, 5, 2	ファング	7,647	1	奥	ヘルベルト・オベルノステラー(26)	C 3 ~ C 2	転落
89	79, 5, 13	ダウラギリ I	8,167	3	合同	ジャン・ルイ・サバリー(30) エリック・ホメーレ(26)〔ペンバ〕	C 5	雪崩
90	79, 5, 16	サガルマータ	8,848	1	ユーゴ	〔アン・プー(28)〕	ホーバイン C	転落
91	79, 9, 19	アンナブルナ I	8,091	3	米	M.U.ユーウィック(41) G.ハーダー(33) E.B.ロバーツ	C 4 6,500m	雪崩
92	79, 10, 3	サガルマータ	8,848	1	国際	レイ・ジェネ(48) (アメリカ)	8,400m ↓	疲労凍死
93	10, 3	〃		1	〃	ハンネローレ・シュマツ(39f)(ドイツ)	S コル上 ↓	疲労凍死
94	79, 10, 9	パタール・ヒウンチュリ	6,441	3	日	藤井博子(28) 山崎のり子(28)〔HP 1名〕	B C 下4,000m	雪崩
95	79, 10, 9	マナスル	8,163	1	アルゼ	エドガルド・ホセ・ボルセヤナ(29)	6,000m 上	雪崩
96	79, 10, 24	アマ・ダブラム	6,812	1	ニュジ	ケネス・ヒスルブ(22)	西壁	雪崩

No.	遭難日	山 名	標高	人数	所属	遭 難 者 名	遭難場所	原 因
97	79,10,下	ブモ・リ	7,161	1	スイス	ヌマ・チーザ(26)		肺水腫
98	80, 2,16	パルチャモ	6,187	2	日	藤原八十八(30) 山崎次男(36)	6,000m下	滑落
99	80, 3,下	アンナブルナⅢ	7,555	3	豪	S.モース、N.リーヴス、R.シュミット	C 1 上	雪崩
100	80, 4,27	アンナブルナⅡ	7,937	1	日	田辺郁夫(36)	6,700m	滑落
101	80, 4,28	ローツェ・シャール	8,400	1	仏	ニコラ・ジャジュール(34)	8,000m	転落
102	80, 5, 4	ヤルン・カン	8,505	2	メキシコ	ウーゴ・サルダナ(26) アルフォンソ・メジナ(27)	頂上付近	行方不明
103	80, 5,17	ローツェ	8,516	1	スペイン	〔バサン・ニマ〕	C 1 6,100m	雪崩
104	80, 5,26	バルンツェ	7,220	2	仏	ジュリアン・グロー(33) フィリップ・グレサ(23)	6,500m	行方不明
105	80, 9, 6	サガルマータ	8,848	1	伊/ネ	〔ナワン・カルサン〕	アイスF	セラック
106	9,21	〃		1	〃	フランコ・マリオ(34)	7,000m	雪崩
107	80,10, 3	アンナブルナⅠ	8,091	1	独	W・トリンクレ(45)		転落
108	80,10, 7	ダウラギリⅠ	8,167	1	米	リン・グリフィス(f)	C 2 5,800m	雪崩
109	80,10, 9	ガネッシュ・ヒマールⅢ	7,110	3	日	黒岩薫(26) 水野勝(22) 照井博(35)	5,600m付近	雪崩
110	81, 1,12	サガルマータ	8,848	1	日	竹中昇(27)	6,800m	転落
111	81, 4,23	ガネッシュ・ヒマールⅣ	7,012	1	豪	デヴィット・スローン(23)	C 2 5,790m	雪崩
112	81, 5,23	ダウラギリⅠ	8,167	1	アルゼ	アルベルト・マリオ・セラノ(34)	7,400m下	疲労凍死
113	81, 9,27	アンナブルナⅠ	8,091	4	仏	〔ベンバ・ツェリン、ニマ〕 9/28 A.ドリユ(27) I.ファブル(36)	C 2 C 1	雪崩 〃
114	81, 9,29	ガンガブルナ	7,455	2	日	坂本武(29) 鈴木明(24)	C 2 6,750m	雪崩
115	81,10,11	アンナブルナⅡ	7,937	1	日	市川協一(29)	C 5 上	転落
116	81,10,15	カンチェンジュンガ	8,586	1	仏	ジュン・ジャック・リクアール(29)	頂上下	転落 ↓
117	81,10,16	ローツェ・シャール	8,400	2	スイス	ピエール・ファヴェ、フィリップ・バタン	8,150m下	転落
118	10,16	〃		1	〃	ジョセフ・フォーシェール	B C 下	転落
119	81,10,31	アンナブルナⅠ	8,091	1	日	加藤康二(32)	8,000m	転落
120	82, 4,24	アンナブルナⅢ	7,555	1	日	岡部政美(30)	C 2～C 3	セラック
121	82, 5, 4	アンナブルナⅠ	8,091	1	独	ヴェルナー・ビュクリ(42 スイス)	C 4 7,200m	高山病
122	5,中	〃		1	〃	〔HP 1名〕		行方不明
123	82, 5,11	マナスル	8,163	2	スペイン	エンリク・フォント、ベレ・アイメリチ	C 5 7,400m	雪崩
124	82, 5,19	チョー・オユー	8,201	1	奥	ラインハルト・カール(36)		雪崩
125	82, 8,31	サガルマータ	8,848	3	加	〔アン・チュルデン、バサン・ソナム ダワ・ドルジェ〕	アイスF	雪崩
126	82, 9, 2	〃		1	〃	ブレア・グリフィス(33)	アイスF	セラック
127	82, 9,26	マカルー	8,463	1	ポーランド	タデウシュ・シュルツ(48)	7,400m	高山病
128	82, 9,27	サガルマータ	8,848	1	スペイン	〔ラクバ・ツェリン(38)〕	C 2 6,750m	高山病
129	10,14	〃		1	〃	〔ニマ・ドルジェ(22)〕	8,300m	転落
130	82,10,17	アンナブルナⅠ	8,091	1	英	アレックス・マッキンタイア(28)	7,200m	落石
131	82,10,18	ランタン・リルン	7,234	1	伊	ブルーノ・クレバツ		雪崩
132	82,10,18	アンナブルナⅠ	8,091	2	日	赤松進(29) 小野幹雄(30)	C 2 5,400m	雪崩
133	82,12,18	マナスル	8,163	1	日	佐久間隆(32)	エブロン	滑落
134	82,12,28	サガルマータ	8,848	2	日	加藤保男(33) 小林利明(34)	南峰コル	行方不明
135	83, 4,24	マナスル	8,163	2	ユーゴ	イエルネイ・ザブトニク(31) アンデ・ブツェン		雪崩

No.	遭難日	山 名	標高	人数	所属	遭 難 者 名	遭難場所	原 因
136	83, 5, 5	アンナプルナⅡ	7,937	1	奥	クラウド・シュラムベルガー(27)	7,300m	転落
137	83, 5, 23	チャマール	7,187	1	日	碓宏一(21)	C 2 5,600m	雪崩
138	83, 9, 23	ガネッシュ・ヒマールⅡ	7,110	1	ポーランド	アンジェイ・ハルトマン		転落
139	83, 9, 24	アンナプルナⅠ	8,091	3	韓	隊員1名〔マガールポーター2名〕	C 2	雪崩
140	83, 10, 3	マカルー	8,463	1	ニュージー	マシュー・デンツ	6,400m	雪崩
141	10, 15	〃		1	〃	マーク・ムーアヘッド	6,800m	転落
142	83, 10, 16	ヒマルチュリ	7,893	2	日	長谷伸宏(27) 藤田雅之(31)	6,100m	転落
143	83, 10, 6	サガルマータ	8,848	1	日	〔バサン・テンバ〕	8,600m	転落
144	83, 10, 8	サガルマータ	8,848	2	日	吉野寛(35) 禿博信(32)	頂上下	転落 ↓
145	83, 10, 11	チョブジェ	6,689	2	奥	カール・ファイファー(43) ウド・エルトゥル(22)	C 2 5,850m	雪崩
146	83, 10, 12	チューレン・ヒマール	7,371	2	独	J.P.ハム(24) K.ハヴリチェク(22)	C 3 5,800m	雪崩
147	83, 10, 中	アンナプルナⅢ	7,555	1	英	ロバート・アトリー(21)	6,200m	高山病
148	83, 10, 21	ピサン・ピーク	6,091	1	日	安田幸保(33)		転落
149	83, 10, 28	アマ・ダブラム	6,812	1	スイス	ギド・ビュマン		転落
150	10, 28	〃		1	〃	マヤ・ゼン(f)		高山病
151	83, 11, 中	ダウラギリⅠ	8,167	1	日	陳親博()	B C 下	高山病
152	83, 12, 24	アビ	7,132	1	ポーランド	アンジェイ・ビエルニ(37)		
153	84, 3, 26	サガルマータ	8,848	1	印	〔アン・リンジ(49)〕	アイスF	雪崩
154	84, 4, 21	サガルマータ	8,848	1	ブルガ	フリスト・イワノフ・プロダノフ(41)	8,500m	行方不明
155	84, 4, 21	アンナプルナⅠ	8,091	2	仏	フィリップ・デュマ(33) P.タリアーニュ(28)	C 3 6,150m	雪崩
156	84, 9, 中	マカルー	8,463	1	スペイン	連絡官	BC	肺水腫
157	84, 10, 16	サガルマータ	8,848	1	チェコ	ヨゼフ・ブソトカ(50)	S コル下	転落
158	84, 10, 23	ダウラギリⅠ	8,167	1	チェコ	ヤン・シモン(25)		転落 ↓
159	84, 10, 24	サガルマータ	8,848	2	ネパール	ヨゲンドラ・タバ〔アン・ドルジェ〕	8,400m	転落
160	84, 12, 12	マナスル	8,163	1	ポーランド	スタニスワフ・ヤボォルスキ	B C 上	転落
161	84, 12, 13	プモ・リ	7,161	2	米	R.ピアース(26) R.ウィルソン(30)	6,950m	行方不明
162	85, 1, 5	カンチェンジュンガ	8,586	1	米	クリス・チャンドラー(36)	7,575m	高山病
163	85, 3, 4	クワンデ	6,101	1	日	田辺信明(22)	頂上下	滑落
164	85, 4, 22	ヤルン・カン	8,505	1	ユーゴ	ボルト・ベルガント(31)	8,350m	滑落
165	85, 4, 29	グルジャ・ヒマール	7,193	1	日	小林昭一(44)	6,900m	滑落
166	85, 5, 4	アマ・ダブラム	6,812	1	日	石橋真(32)	5,950m 下	転落
167	85, 5, 4	マナスル	8,163	1	奥	トーマス・ユエエン(27)	7,300m	転落
168	85, 5, 10	ガウリシャンカール	7,134	1	日	酒井健作(28)	5,900m	滑落
169	85, 5, 16	ヒマルチュリ	7,893	2	ハンガリ	S.サナディ(36) P.グレスコヴィッチ(33)	6,800m	行方不明
170	85, 5, 中	グルジャ・ヒマール	7,193	1	ルーマニア			落石
171	85, 10, 7	サガルマータ	8,848	1	印	キラン・インデル・クマール(40)	8,500m	転落
172	10, 11	〃		4		R.S.バクシ(25) V.P.ネギ(28) J.バフグナ(35) M.U.Bラオ(24)	S コル	疲労凍死
173	85, 10, 18	ランタン・リルン	7,234	3	米	D.ニューウエル、E.スベイク 〔ギャルツェン〕	4,900m	雪崩

No.	遭難日	山 名	標高	人数	所属	遭 難 者 名	遭難場所	原 因
174	85,10,中	マカルーⅡ	7,678	2	オランダ	2名がBC撤収前に踏査に出た		行方不明
175	85,10,22	アンナプルナS	7,219	1	独	ルパート・ヴォルシュラガー(26)	6,400m	雪崩
176	85,10,22	アンナプルナS	7,219	2	ギリシ	K.ツァツァラゴス(28)	6,400m	雪崩
177	10,22	〃		1	〃	R.ヴォールシュラガー ディミトリス・ブーントラス		雪崩
178	85,10,23	カン・グルー	6,981	1	独	アレンツ・ベルトン(42)	5,500m	転落
179	85,10,25	ローツェ	8,516	1	ポーランド	ラクハウ・ハウダ	8,200m	滑落
180	85,10,25	マナスル	8,163	1	日	[ニマ・ノルブ(25)]	C2 6,400m	雪崩
181	85,11,2	マカルーⅡ	7,678	2	仏	P.ドロンプ(48) M.モルガヌ(28)	7,100~7,450m	滑落
182	85,11,上	ガネッシュ・ヒマールⅣ	7,052	3	ポ	K.ソビッキ、V.ヤンチャワ、K.プシスタウ	4,900m	雪崩
183	85,12,7	アンナプルナⅠ	8,091	2	韓	[パサン・ノルブ、キーパー・シェルパ]		転落
184	86,1,5	タウチェ	6,501	1	日	門元厚嘉(27)	5,800m	転落
185	86,1,11	カンチェンジュンガ	8,586	1	ポーランド	アンジェイ・チョク(37)	C3 7,250m	肺水腫
186	86,4,4	ティリツォ・ピーク	7,134	2	独	ルドルフ・シュプリングマン(54) ヘルマン・エーベルト(26)	BC下4,570m	雪崩
187	86,4,13	マカルーⅡ	7,678	1	米	エドウィン・ターレル(32)	5,200m	肺水腫
188	86,5,3	マナスル	8,163	1	合同	ヴィルヘルム・クライバー(48)(独)	7,000m	行方不明
189	5,4	〃		1	〃	ディーター・オーベルビヒラー(44)(奥)	7,200m	転落
190	86,5,12	ダウラギリⅡ	7,751	1	韓	キム・スング(26)	7,300m	滑落 ↓
191	86,9,21	ダウラギリⅠ	8,167	1	奥	フランツ・ミュレダー(24)	BC 3,700m	高山病
192	86,9,23	アンナプルナⅠ	8,091	1	仏	フツワ・グリゾン(25)	6,200m	転落
193	86,9,25	マカルー	8,463	1	スイス	マルセル・リュディ(48)	7,850m	肺水腫
194	86,9,26	アンナプルナⅢ	7,555	1	伊	マッシモ・カズリーニ(28)	5,500m	落水
195	86,9,28	サガルマータ	8,848	1	スイス	ジモン・ブルクハルト(52)	C4下	雪崩
196	10,1	〃		1	〃	[アン・ギャル]	アイスF	セラック
197	86,10,15	ヒマルチュリN	7,540	3	合同	V.ヴァインツィール(39) P.ヴァウアー (21)、G.アイゼンド(22)	C2上	雪崩
198	86,10,23	チョー・オユー	8,201	1	スイス	ピエール＝アラン・スタイナー(26)	6,800m	転落
199	86,10,26	ヒマル・チュリ	7,893	1	日	中村日出(31)	7,550m	滑落 ↓
200	86,10,27	ローツェ・シャール	8,400	1	スペイン	ペドロ・アロンソ・ロベス(31)	7,400m	転落
201	86,11,1	クンバカルナ	7,710	1	豪	キース・エドガートン(30)	6,500m	高山病
202	86,11,20	メラ・ピーク	6,473	1	日	松本秀則(29)	3,900m	高山病
203	86,12,中	クワンデ	6,101	2	日	富士居孝明(24) 松熊朝夫(28)		転落
204	86,12,30	ヒマルチュリ	7,893	1	ポーランド	イェジ・クリンツェヴィッチ(35)	C2～C1	滑落

※1905年～1986年 総死亡者数 334名

	総 数	隊 員	ポーター	L/O
1905～1965	34	18	16	—
1969	14	10	4	—
1970年代	136	87	48	1
1980～86	150	129	20	1
総 計	334	244	88	2

9-6 ニンチン・カンサ (寧青抗沙・Ningqin Kangsha)

* 位置：ラサ (3,658m) の南西約113km

[28° 90' N, 90° 10' E]

* アプローチ：ラサまでは北京～成都が飛行機で約2時間、成都～ラサが約1時間40分の旅。ラサからはカンパ・ラ (4,756m) に登り、ヤムドク・ツォからランカーズの手前でギャンツェ方面に向かい、カロ・ラ (5,036m) を下ると南面のBCである。さらに6kmほど西に進み、公路を外れて北に進むと西面のBCに到着する。ラサからカロ・ラまではジープで4時間半程度。

* ルートの所要日数：95年南面の福岡大学隊は、7月27日にBCを建設し、キャンプ3つを出して8月17日に登頂した。一方、97年に西面に入ったHAJ隊は、95年の栃木隊ルートに取りつき、7月28日にBCを建設し、キャンプを3つ出し8月17日に登頂した。

* 山の概念：主峰7,206mの南西稜上にトゥゴロン6,763mがある。北稜上に6,484mのカマ峰、南東稜上に6,570m峰がある。

また、カルション・チューを挟んだ南方には、カルション6,571m、チャンサンラム6,325m、6,249mのジェイトンソンヌムなどがあり、短期間の山登りが楽しめる。

* 通常の登山時期：春、夏、秋

* 山名：チベット語で「幸福の水、幸福の源」の意。ノジンカンサNodjinkangsa、レンリカンサLenrikangsa、ケンカンKyenkan-gとも呼ばれる。

* 小史：1985年秋、大分県山岳連盟隊が、南西稜から登頂を試み、トゥゴロン峰の初登頂に成功したが主峰は断念した。86年春、チベット隊が南西稜から4月18日初登頂に成功した。92年に自衛隊山岳連盟隊、95年夏栃木県高体連隊が西面から初登攀。同年夏に南面から福岡大学と北京大学の合同隊が登頂した。97年夏にはHAJ隊が栃木ルートから登頂に成功した。

参考文献：輝ける白き峰 [栃木県高体連登山部1996年3月刊]

登山の概要

■主峰 (7,206m)

1985年

8月～9月 南西稜 大分県山岳連盟隊

初登頂を目指して9月2日13人で入山。南面氷河下5,000m地点にBC設営。右岸から稜線に出て5,600m地点に10日C1を設営。15日5,950m地点に仮C2を出す。21日南西稜に入り、6,350m地点にC2を設営した。23日アタック出たが6,800m地点でクレバスに前進を阻まれ断念。同日トゥゴロン峰を目指した松元、中尾両隊員が初登頂に成功した。

[隊長：興田勝幸(41) 伊東亨(55) 宮脇稔(32) 木辺正夫(53) 松元徹(35) 杉山恵治(31) 中尾俊孝(32) 西嶋久貴(30) 浅田誠治(28) 恒松勲(27) 荷宮英二(26) 原勇人(23) 井原真美(25)]

[第2次チベット・ヒマラヤ登山隊報告書 (大分県山岳連盟 1986年12月刊)]

1986年

4月～5月 南西稜 チベット登山隊

初登頂を目指して4月10日南面4,996m地点にBCを設営。18日6,700m地点にACを設営。一旦BCに下降し、27日6,100mのC1を13人が出発しACに入る。28日7時半にACを出発したがテレビカメラマン1名が脱落。9時25分桑珠が初登頂に成功。9時45分他の11名(加布、旦真多吉、小格桑、辺巴、拉旺、旦増、旺多、加措、辺巴扎西、小次仁、普布)も登頂に成功した。

[隊長：羅則以下20名]

[中国登山運動史P286]

1992年

4月～5月 南西稜 自衛隊山岳連盟隊

4月18日5,000mにBC設営。5,600m地点

にC 1、6,200m地点にC 2を設営し、5月4日に隊員1名とチベタン1名が登頂した。

[隊長：大崎直彦以下6名]

[山岳年鑑P51]

1995年

7月～8月 南西稜 日中友好合同登山隊

福岡大学と北京大学の合同隊。先発が7月26日南面氷河下にBC設営。8月7日5,700m地点にC 1設営。13日6,300m地点にC 2設営。16日6,600m地点にC 3を設営して翌日4時20分に石村、矢田、菊池、重川の四名がアタック。9時20分に登頂した。14時41分に中国側も登頂した。

[隊長：山内一男(58) 川邊義隆(54) 石橋康治(48) 菊池守(40) 石村義男(44) 矢田康史(47) 重川英介(20) 前田亮(18) 堀川明大(19)]

[寧金抗沙峰合同登山隊報告書(福岡大学体育会山岳部・山岳会)]

7月～8月 西面～南西稜 栃木高体連隊

7月28日西面入口4,690m地点にBC設営。29日4,850mにABC設営。8月2日5,750m地点にC 1設営。8日6,400m地点にC 2設営。11日6,480m地点にC 3設営。17日石澤、神島、菅又、ダワ・チリが登頂。19日後藤、稲葉、石塚、深谷、チュワン・ニマ登頂。20日滝田、川崎、猿山、小口、ミンマ・ヌル

登頂。

[隊長：石澤好文(43) 神島仁誓(41) 後藤尚(34) 増渕仁一(47) 滝田道明(43) 荒川竜一(41) 川崎真澄(39) 富永孝明(34) 猿山浩(34) 稲葉昌弘(33) 林光武(32) 小口貴文(29) 遠藤洋志(26) 菅又久雄(26) 林祐寿(26) 石塚学(21) 深谷篤志(19) 松島一雄(30)]

[輝ける白き峰(栃木県高体連登山部 1996年3月刊)]

1997年

7月～8月 西面～南西稜 HAJ隊

7月28日西面マヨン部落上の4,850m地点にBC設営。栃木ルートに入り、8月5日C 1を5,800m地点に設営。三角岩を越え11日C 2を6,400m地点に設営。16日6,500m地点にC 3を設営し、翌日志小田、飛田、森山、加藤、高橋、川崎が8時に出発し12時48分登頂に成功した。18日にも天城、野口、石川が登頂。

[隊長：天城敏彦(50) 志小田美弘(38) 野口道雄(60) 飛田和夫(51) 森山安次(47) 脇田康治(46) 鮫川太一(46) 石川龍彦(45) 加藤和美(44) 滝田収(40) 高橋敏雄(38) 川崎浩史(33) 森達弥(26)]

[ニンチン・カンサ峰登頂(ヒマラヤ314号 1998年1月号)]

9-7 チョム・カンリ(穿母崗日・Qungmo Kangri)

* 山脈：ニエンチェンタンラ山群、第二の高峰。

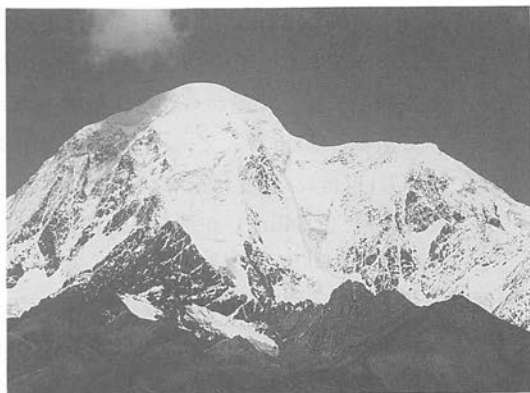
* 位置：ラサ(3,658m)の北西約113km。

[28° 90' N、90° 10' E]

* アプローチ：ラサまでは北京～成都が飛行機で約2時間、成都～ラサが約1時間40分の旅。ラサからは、ジープで油田で有名なヤンバジェン(4,270m)に向かう。ここまで87kmで2時間。スゲ・ラ(5,350m)を越えて南面のBC(4,750m)までジープが使える。

* ルートの所要日数：97年南面の中央大学隊は、4月26日にBCを建設し、キャンプ3つを出して南稜から5月13日に登頂した。

* 山の概念：主峰7,048m。東稜上に約6,700m峰があるが、完全な独立峰。



- * 通常の登山時期：春、夏、秋
- * 山名：「女神の峰、知恵の目」とも呼ばれる。
- * 小史：青海のシーニンから西藏のシガツェに続く古くからの青藏公路の横にあるため昔から知られていた。1994年秋、韓国隊が初めて偵察に入り、96年10月7日に中国と韓国の合同隊によって南稜から初登頂された。97年5月13日中央大学隊が第二登。
- * 参考文献：「中央大学チョムカンリ登山隊1997 仮報告書（1997年6月刊）」

登山の概要

主峰（7,048m）

1996年

9月～10月 南稜 中国・韓国合同登山隊
初登頂を目指して9月中旬入山。南稜にルート
を伸ばし、10月7日に中国側4名、韓国側
5名が初登頂に成功。続いて8日と9日にも

韓国側が登頂した。

1997年

4月～5月 南稜 中央大学隊

直前になり隊長が不参加となり、小林隊長
となる。4月26日南面4,750m地点にBC設
営。28日ヤクで荷を運び5,250m地点にAB
C設営。5月5日南稜上5,850m地点にC1
設営。南稜にルートを作り、12日6,600m地
点にC2設営。13日猪熊、松本とシェルパ2
名が登頂した。

〔隊長：小林正典(32) 猪熊隆之(26) 土屋
隆明(21) 松本信太郎(20)〕

〔中央大学チョムカンリ登山隊1997（1997年
6月刊）〕〔女神の峰「知恵の目」に守られ
て（猪熊隆之）岳人602号 1997年8月号〕
〔富士山事故の呪縛からの解放（猪熊隆之）
山と溪谷746号 1997年9月号〕

9-8 ニエンチェンタンラ（念青唐古拉・Nyainqentanglha）

- * 山脈：ニエンチェンタンラ山群の最高峰。
- * 位置：ラサ（3,658m）の北北西100km。
[30° 40' N、90° 60' E]
- * アプローチ：ラサまでは北京～成都が飛行機で
約2時間。成都～ラサが約1時間40分の旅。
ラサからはヤンパチュン(4,270m)を越え
てジープ2時間で、南面のパニ・チュー
4,800mのBCに着く。
- * ルートの所要日数：86年南面の東北大学隊は、
3月27日にBCを建設し、キャンプ4つを
出して5月8日に初登頂した。
- * 山の概念：主峰7,162m。主峰は頂上付近が岩
壁になっており、山頂から南東4.5kmのび
る主脈上には、北西から順に、稜線上のコ
ブである7,111m峰、こんもりとした中央
峰（7,117m）、高度は低いけどしりとし
た南東峰（7,046m）が連なる。周辺には、
十数座の6,000m峰がある。
- * 通常の登山時期：春、夏、秋
- * 山名：チベット語で「ニエン」畏敬する強力な
精霊の意といわれ、「ニエンチェン」とは

日本でいう「大明神」。「タンラ」は「平原
の神」を意味する。「ニイン」は、「心」、
「チェン」が「大きい」、「タン」は「平原」、
「ラ」は「峠」とする説もある。

- * 小史：1985年秋、東北大学が3人の偵察隊を派
遣。86年本隊が5月8日初登頂に成功した。
89年夏にオーストリア隊が中央峰の初登頂
に成功。95年8月22日中津川隊が東峰（IV
峰）の初登頂に成功。

登山の概要

主峰（7,162m）

1985年

9月～10月 偵察隊 東北大学隊

9月30日4,800m地点にBCを設営。南氷
河5,600m地点に達した。その後北面も偵察。
〔隊長：阿部一育夫 和田道治(24) 石川次
郎〕

1986年

3月～5月 西稜 東北大学隊

3月25日南面4,800m地点にBC設営。4

月5日5,300m地点にABC設営。8日5,700m地点にC1。20日西稜のCOL6,270mにC2設営。5月3日西稜6,600m地点に仮C3を出し、6日軍艦岩直下にC3(6,800m)を作り、8日、長沼、丸山、和田がアタック。22時12分に初登頂に成功した。

[隊長：金森安孝(33) 葛西森夫(63) 長沼宏(32) 丸山裕介(27) 境秀紀(27) 和田道治(25) 浅田睦彦(25) 遠藤昭彦(24) 北嶋譲(24) 関根雅夫(23) 片山正文(34) 酒井信光(42)]

[チベット高原の盟主=ニエンチェンタンラ=(東北大学山の会) 1994年6月刊]

*中央峰(7,117m)

1989年

7月～8月 南西稜 オーストリア隊

中央峰の初登頂に成功した。ヴォルフガング・アクトス隊長ら女性を含む5名が7月28日5,900mのCOLから初登頂に成功。

[隊長：Wolfgang Axt Erika Prokosch
Ursula Bauer Erich Bosina Anna Sza-

lay Fridl Herzog Teodor Fritsche Herwig Schnnnt Gunter and Werner Honlinger Fridl Widder Karl Wuttke]

[AAJ=Vol.32 ~~~~ =登頂者]

1992年

8月 南西稜 北京大学隊

中央峰の第二登に成功した。8月15日12時間のアルバイトの末、6,800m地点にC2を設営。翌日4名がアタックしたがブリザードのため7,000m地点で敗退。17日ラジャ・ツェリン、リー・ルイ、ウー・ハイジュンの3名が登頂に成功した。

[隊長：リー・ルイ(20) ラジャ・ツェリン(20) ウー・ハイジュン(20) タン・ヤンチン(20) 他に6名(内女性2名)]

[ヒマラヤ253号 1992年12月号]

山の情報誌「岳人」



毎月15日発売 (日・祝日の場合は前日) 定価700円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からとお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は124円です。年間購読料は8,900円で送料は当社負担です。

お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

98年	特集
★ 1月号	ぼくの好きな雪の山小屋で
2月号	粉雪わけて爽快山スキー
★ 3月号	駅から登るとっておきの山
4月号	新緑と残雪を求めて5月の山
★ 5月号	山の本、名作をめぐる春山紀行
6月号	高層湿原、もう一つの尾瀬へ
★ 7月号	夏は北海道の花と溪流へ
8月号	真夏に涼を求めて、高原へ
9月号	初秋の単独行の山歩き
★ 10月号	上信越の紅葉をさぐる
11月号	名峰を訪ね、冬枯れの温泉へ
12月号	冬山入門、心構えと特選コース

(★は特大号となります)

東京新聞出版局(中日新聞)
東京本社

〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 TEL 03-3740-2674
全国の書店で発売中/中日新聞販売店でも取りつぎます

■ 寸 感 ■

1996年春、「ブラック・スプリング」と呼ばれるエヴェレストでの大量遭難が起きた。その時、この山を撮影していたのが、アメリカのIMAX隊であった。その隊の様子は既に「非情の最高峰エヴェレスト」として出版された。このほどこれが映画となって試写会があった。大画面に映し出されるエヴェレストの様々な姿は多くの人々に感銘を与えることだろう。9月10日～15日に期間限定で上映。10月3日から一般公開される。(山森)

事務局日誌(7月)

- 1日(水) チベット登山協会ヘニンチン・カンサ隊の件についてFAX
- 4日(土) 労山チョモランマ報告会兼壮行会(東京、山森、八木原、酒井)
- 6日(月) ラモ・シェ隊ビザ申請
- 8日(水) 外務省ヘニンチン、ラモ・シェ隊の計画書等送付
- 9日(木) ヒマラヤ321号発送

- 11日(土) 合同家族会および合同壮行会(東京、かんぽヘルスプラザ東京 140名)
JACカンチェンジュンガ隊追悼会(東京、山森)
- 19日(日) ニンチン・カンサ隊(関根幸次隊長以下10名)出発
山森専務理事訪中
- 26日(日) 山森専務理事と日南隊員帰国
- 27日(月) 東京集会(9名)

ヒマラヤ No.322 (9月号)

平成10年8月10日印刷 10年9月1日発行

発行人 稲田定重

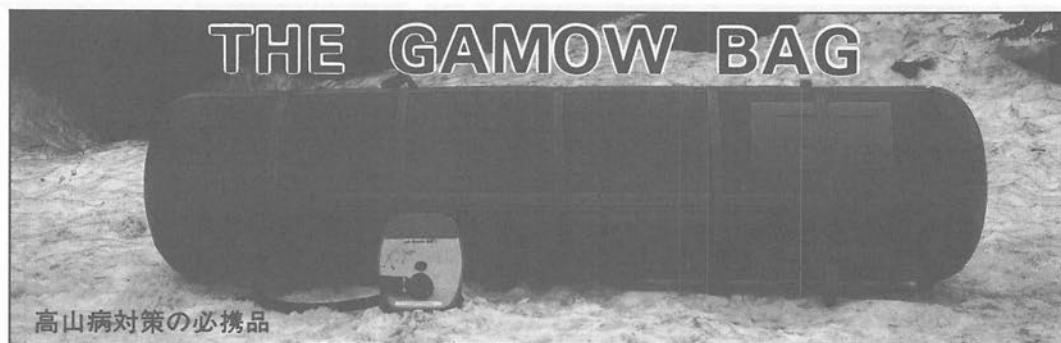
編集人 山森欣一

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

●ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)

●パルスオキシメーター

(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遙かなる旅



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア



株式会社 西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)1391(代表)

キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)8384(代表)

大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU, NEPAL ☎221707

運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店／〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店／〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店／〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店／〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店／〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店／〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館／〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店／〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店／〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店／〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店／〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店／〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店／〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店／〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブラーカ店／〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブラーカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店／〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店／〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店／〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店／〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店／〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店／〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店／〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メルオーダー)／〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所／〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004